

口腔の役割

一対の神様

夏になると、県内では多くの雷が発生します。これは本県の地形が影響しており、赤城山、榛名山、妙義山などの山に囲まれた平野部で、夏の強い日差しに温められた空気が上昇気流を作り出し、雷雲となって雷を発生させると言われます。そして冬には、日本海側で雪を降らせたあとの乾燥した冷たい空気が、上越国境の高い山を越えて関東平野に吹きおろしてきます。「空っ風」と呼ばれる「赤城おろし」、「榛名おろし」などの強く冷たい風、これら群馬特有の風土が“かかあ天下”や“義理人情”などの群馬県民の人柄を育ててきたと言われ、その県民性を「上毛かるた」は“雷と空風 義理人情”と読んでいます。

この絵札、雷神が描かれていますが、もともとは風神雷神図(俵屋宗達 17世紀 寛永年間)に描かれた一対の神様です。

昔、雷は神様が鳴らしている(神鳴り)と恐れられ、大雨や台風などの暴風は農作物に多大な被害をもたらす一方で、水の恵みを与えるものとされて祀(まつ)られていました。



〈参考〉「上毛かるた」で見つける群馬のすがた
(群馬県「上毛かるた」利用許諾第 29-02025 号)

ところで時は同じく、庶民の間では、風神・雷神とは対照的に、愛嬌あるもう一対の神様が大切にされていました。江戸時代、自分の左手側の上の前歯を「大黒歯」、右手側の上の前歯を「恵比寿歯」と呼んでいました。諸説あるようですが、大黒様は米俵に乗り、恵比寿様は鯛を抱えていることから、食に関わりの深い神を前歯の2本に見立てた、あるいは大黒様と恵比寿様を拝む「二福神」という民間信仰などがその由来のようです。



出雲大社相模分祠(神奈川県泰野市)

打ちでの小槌と大きな袋を肩に背負った大黒様は大黒天と呼ばれ、インドではシヴァ神の化身であり、破壊や戦闘の神様とされますが、日本伝来後は開運や財運、五穀豊穡の福の神と変身し、恵比寿様は見ての通りの漁業の神様であり、七福神の中では唯一の日本出身、商売繁盛の福の神とされています。

歯科医院が無い時代、前歯2本を一対の神様に例え、この歯が欠けると「お金がこぼれていく」と言われ、歯を大切にしよう、戒めの意味を込めていたと容易に想像できますが、それ以外にも、体の入り口である口腔の正面左右に一対の福の神を配置させることは、あたかも守るべき寺社に背を向け、参拝者に正対する形で両側に置かれた「狛犬(こまいぬ)」にも共通する、大切な門番としての意味を込めていたのかも知れません。ちなみに上下左右中央の計8本の前歯の呼び名は、切歯(せっし)が一般的ですが、現在でもヒトを含めた動物の前歯を門歯(もんし)と呼んでいます。

さて、「ら」で始まるこの読み札ですが、珍しいことに赤い色をしています。「上毛かるた」の作者たちは、戦後間もなく、日本を占領していた GHQ(連合国軍総司令部)の強硬な禁止指令により、札にすることを許されなかった幾人かの上州人への思いと、指令への反発を、群馬特有の雷と空っ風の気象現象にたとえて読み、赤く染めたのだそうです。一方の絵札ですが、風神雷神図の原画とは異なり、こちらの雷神には大黒菌、恵比寿菌は描かれていません。幼少時から見慣れているためか、こちらの方が愛着があると思うのは、私だけではないはずです。

【歯科口腔外科診療部長 今井 正之】

